

様式【学校評価資料】

総社小学校

学校 経 営 目 標	具体的計画	令和元年度の達成基準	自己評価(中間)			自己評価(最終)			学校関係者評価 自己評価の適切さ
			達成状況	評価	改善策	達成状況	評価	改善策	
1 心の教育の充実	【やさしい子】 1 道徳教育、人権教育、だれもが行きたくなる学校づくりの取組を充実することにより、児童が気持ちよい思いやりや思いやりの心を生きて生活の中で実践することができるようにする。 2 「すきだ総社小学校運動」すずんで挨拶、きちんと整頓、だまって掃除を推進する。 (総社を愛する子供) (心優しい子供) (礼儀正しい子供)	①進んであいさつができてという回答が85%以上である。 (児童、保護者、教職員) 【人間関係・特別支援教育】	教職員: 97.9% 保護者: 78.3% 児童: 91.8%	B	・各学年で行っているあいさつ運動の取組をあいさつ運動強化週間に合わせて紹介する。 ・児童会中心のあいさつ運動と地域・ボランティアの方を巻き込んだあいさつ運動に取り組む。	教職員: 97.7% 保護者: 79.6% 児童: 92.1%	B	・児童会中心の取組と日常の指導により、児童の意識は高まってきていると感じる。 ・今後は、「目的を考えた自発的なしべルアップしたあいさつができるように指導していき、家庭や地域でも自然にあいさつができるようにしたい。	・自己評価は適切である。 ・児童会中心の取組が見られるなど、昨年度の課題であった「自発的なあいさつ運動に取り組んでおり、継続してはいない」保護者の肯定的評価が低い背景には、学校の外や1対1など少人数の場面であいさつができていないことがあるのではないか。家庭・地域と連携しながら指導を工夫してほしい。
		②思いやり的心をもて生活しているという回答が85%以上ある。 (児童、保護者、教職員) 【人間関係・特別支援教育】	教職員: 97.9% 保護者: 92.4%	A	・相手の尊重する気持ちを育てるために、「さん」を付けて呼ぶように、引き続き指導を続けていく。 ・各学年でピア・サポートについて振り返る時間を取る。 また、ピア・サポートができていない場を捉えて、価値づけるようにする。	教職員: 100.0% 保護者: 93.1%	A	・相手の尊重する気持ちを育てるために、授業中は「さん」を付けて呼ぶように引き続き指導を続けていく。 ・異学年へのピア・サポートを通して、児童は友達に対して優しくすることや優しくされることを経験している。ピア・サポートの目的意識をしっかりと持て、SELの指導を通して活動後の振り返りの充実を図っていき、生活の中に広げていきたい。	・自己評価は適切である。 ・「授業中は「さん」を付けて呼ぶことこの指導」(異学年へのピア・サポート)は今後も継続してほしい。 ・日常の生活場面で教え合ったり、支え合ったりすることが自然にできるようになってほしい。
		③誰かが活躍できる機会を作ったり児童同士をつながりを強める活動を取っていきという回答が80%以上である。 (児童、保護者、教職員) 【人間関係・特別支援教育】	教職員: 93.3% 保護者: 90.7%	A	・各学年で、協同学習や仲間づくりの活動に積極的に取り組み、学校の支持的風土をつくる。 ・縦割り活動(縦割り掃除やいじり活動等)やピア・サポート活動を引き続き推進し、同学年でピア・サポート活動も随時取り入れる。	教職員: 100.0% 保護者: 93.1%	A	・学年で歩調を合わせて、各学年で協同学習や仲間づくりの活動を積極的に進めた結果、支持的風土ができてきたと感じている。不登校の児童も減ってきている。 ・児童それぞれのよき行いを教員や児童同士で見つける活動を積極的に取り入れ、互いに認め合い励まし合う関係をつくり、児童の自己肯定感が高まるようになっていきたい。	・自己評価は適切である。 ・昨年度のアンケート結果と比較すると、今年度は中期アンケート調査の時点から教職員の肯定的評価が高くなり、意識の高まりを感じた。背景には情報があったのか分析・考察し、来年度に生かしてほしい。
		④毎月のいじめ実態把握アンケートにより得た情報が全職員で共有され、いじめの早期対応に役立っているという回答が80%以上である。 (教職員) 【人間関係・特別支援教育】	教職員: 100.0%	A	・毎月のいじめ実態把握アンケートは前からの取組だが、アンケートにより発見し早期対応できたことが1学期に何件もあり、効果を実感できている。 ・成功事例を初任者や若手教員の研修にいかす。 ・いじめの実態把握アンケートにより得た情報を全教職員で共有し、いじめの早期発見・早期対応に引き続き取り組む。	教職員: 97.3%	A	・毎月の「こまったことアンケート」(いじめ実態把握アンケート)や年2回の教育相談でいじめやいじめにつながるケースを発見し、対応でき、効果を実感できたので、引き続き取り組んでいきたい。 ・毎週金曜日に情報交換の機会を持ち、いじめ実態把握アンケートにより得た情報や実際に児童の様子等を全教職員で共有し、来年度に生かしてほしい。	・自己評価は適切である。 ・最終アンケート調査では、「そう思うと回答した割合が80%から70%に減った一方で、「あまりそう思わない」と回答した割合が3%から8%に増加している。「こまったことアンケート」によって情報が得られなかったのか、それとも得られた情報への対応が不安が生じているのか、これらの点を分析・考察し、来年度に生かしてほしい。
2 健康・体力作りの推進	【たくましい子】 3 健康教育、特別活動を充実させることにより、児童に基本的な生活習慣を身に付けさせる。 4 目標を持って主体的に体力づくりに取り組み、最後まで粘り強く頑張る心を育てる。	⑤睡眠とメディアコントロールを中心とした、基本的な生活習慣が身に付いているという回答が80%以上である。 (児童、保護者、教職員) 【保健安全】	教職員: 93.3%	B	・メディアコントロール週間を中学校のテスト週間と重ねて実施したり、幼稚園のがんばりカードの内容を幼稚園を参考に保護者の取り組み項目を加えたりして、保幼小中の連携を図り、引き続き家庭を巻き込んだ取組を続ける。 ・本年度は「睡眠」を取りあげた講演会を3～6年生と保護者を対象に行い、児童と保護者の意識を高めて行動につなげる。	教職員: 91.7% 保護者: 80.4% 児童: 74.5%	B	・年間5回のメディアコントロール週間を中心に、減メディアや早寝早起き、睡眠時間に関する取組や家庭への啓発に取り組んできたが、なかなか成果が現れていない。「睡眠」についての講演会を3～6年生と保護者を対象に行い、実践した。睡眠の取組は、児童の学校生活に直結し、家庭との連携がかけがえない。 ・メディアの危険性や睡眠の大切さについて、今後も引き続き指導していく。 ・家庭との連携に向けて、メディアや睡眠について参観日の授業や懇話会を取り上げる。	・自己評価は適切である。 ・数学として結果がなかなか出ていないところはある。児童たちが成長し中学生になったときに成果が出るのではないかと、長期的展望を持って継続して取り組んでほしい。 ・総社中学校区「きらめきEAST 幼小中系統表」は具体的な数値が設定されておりわかりやすい。ぜひとも活用し、まずはメディアに関するルールを決める家庭が増えるよう、家庭と連携した取組を心掛けてほしい。
		⑥自分のめあてを持って運動しているという回答が80%以上である。 (児童、保護者、教職員) 【保健安全】	教職員: 90.6% 保護者: 89.5%	A	・体育の授業では、児童が自分のめあてを持つような手立てや毎時30分程度の運動時間の確保に引き続き取り組む。 ・岡山県が進めている「チャレンジランキング」を学年や学校で取組めるように、取り組みやそつな項目を委員会活動等で紹介する。	教職員: 96.4% 児童: 88.1%	A	・体育の授業では、めあてを持って運動できるよう手立てを工夫してきた。 ・運動委員会による「チャレンジランキング」の紹介により、長年の放り投げと限られた場所を使って運動しているが、運動量の確保には至っていない。 ・体力テストから「投げる力」「握力」に課題がみられた。ドッジボールなどボールを投げる運動や遊具を使った運動を積極的に動かし、体力の向上を図る。運動場の使い方や遊具の使い方等を全教職員で共通理解して指導するようにする。	・自己評価は適切である。 ・「投げる力」「握力」に課題がみられる。さらなる授業力向上を目指し取組を継続してほしい。 ・改善案に示されたように、新しく整備された運動場で、より一層の取組を期待するとともに、力をする児童がなるべく出ないよう、運動場の使い方を工夫してほしい。
		⑦授業が分かりやすいという回答が85%以上である。 (児童、保護者、教職員) 【学力向上】	教職員: 97.3% 保護者: 87.6% 児童: 90.5%	A	・校内研究では、教員が一人一回の研究授業を行い、相互に参観・協議を行うことで、授業力の向上に継続して努める。 ・特別支援教育の視点を取り入れながら、デジタル教材や視覚教材を積極的に活用することで、分かりやすい授業等でも復習することで、確実な習得を目指すようにする。 ・児童が主体的に「学習」に取り組むようにするために、協同学習での役割を与えたり、良質なコミュニケーションを促したりすることを継続して行う。	教職員: 97.4% 保護者: 88.0% 児童: 92.9%	A	・校内研究では、教員が一人一回の研究授業を行い、授業力の向上に努めた。授業の導入の工夫を工夫し、児童に問いを持たせることなど主体的に取り組むようになっている。 ・デジタル教材や具象物等を活用し、より分かりやすい授業にしていきたい。 ・主体的、対話的で深い学びに迫るために、効果的な協同学習を取り入れた授業づくりを研究していく。	・自己評価は適切である。 ・授業を参観しても、各先生方の授業づくりの工夫が見られる。さらなる授業力向上を目指し取組を継続してほしい。 ・アンケート調査では「授業のわかりやすさ」を問う質問の適切さには疑問が残る。保護者にとっては回答していない項目でもあるため、より具体的な取組に焦点を当てた設問にする。対象者から保護者を除く等、検討していただきたい。
3 確かな学力の育成	⑧国語と算数の単元テストの正答率8割以上の児童が、80%以上である。 (教職員) 【学力向上】	教職員: 69.2%	C	・全教科、全領域で岡山型授業のスタンダードを取り入れ、児童が発見しを持って学習に取り組むことができるようにする。 ・単元テスト後、正答率が低い問題は、プリント学習や宿題等で復習することで、確実な習得を目指すようにする。 ・学年会などで学年主任の豊富な実践経験をもとに、若手教員に指導助言を行うことで、指導技術の向上を図ることを継続して行う。	教職員: 96.5%	C	・新学習指導要領の求める力について校内研修等で全教職員に理解を促し、授業改善を目指す。 ・授業的内容や容量が不十分な児童には個別支援を行ってきたが、まだ十分な成果が出ていないので、今後は家庭との連携も行ってみたい。	・自己評価は適切である。 ・引き続き取組を継続してほしい。新学習指導要領での学習が始まる中、どういった結果となるのか期待している。 ・現行の支援体制では限界があるのではないだろうか。個別化の体制を充実させるため、支援員の増加等も市へ要望していただきたい。	
		⑨家庭で学年×10分+10分勉強しているという回答が80%以上である。 (児童、保護者、教職員) 【学力向上】	教職員: 85.7% 保護者: 77.7% 児童: 86.3%	B	・授業と家庭学習の課題を関連付けることで、学習内容の定着を図る。 ・1対1サポート週間後、各クラス代表のナイスノートや校内に掲示することで、児童、保護者が見学する姿が数多く見られた。家庭での自主学習の進め方を児童や保護者に啓発することができた。 ・がんばりカード(家庭での記録)に日々の家庭学習時間の欄を設けることで児童や保護者への意識付けをし、極端に数値が低い児童には個別に指導する。	教職員: 100.0% 保護者: 77.2% 児童: 84.6%	B	・授業と家庭学習の関連付けを継続して行う。 ・「ナイスノート」に限らず、家庭学習のよい取組を児童に伝えていく。 ・懇話や通信で家庭学習のよい方法を伝えることで、保護者と連携を図っていく。	・自己評価は適切である。 ・「ナイスノート」に選ばれたことを楽しみにしている児童も多いようだ。今後も継続してほしい。
		⑩学校から積極的に情報発信が行われているという回答が85%以上である。 (保護者、教職員)	教職員: 74.4% 保護者: 90.5%	B	・引き続き各種の便りやホームページの更新により、学校の取組を知らせる。 ・学級懇話会やPTA支部会等において出た保護者からの声を校内で共有して取組にいかす。	教職員: 83.8% 保護者: 90.8%	B	・各種の便りやホームページの更新により、学校の取組を知らせている。ホームページの更新が滞ることがあったので、タイムリーな発信を心がけていく。 ・本年度は年4回、参観日後の学級懇話会を行った。参加者を増やす工夫をしていく。 ・総社東中学校区「きらめきEAST」として、「学びのたより」を3回発行し、各校園の取組を発信している。	・自己評価は適切である。 ・先生方には「児童と向き合う時間の確保」を大切にしていたというので、今後も学校としての情報発信を行ってみたい。 ・情報発信を行う上で、「受け手である保護者がどういった情報を知りたいのか」という情報収集も必要だと考え、現在も「子ども110番の家」として利用できる家だこなのか、実態が分かるように、開かれた学校づくりを進め、児童の安全を守るためにも実態把握に努めてほしい。
4 開かれた学校づくり	⑪校舎改築に伴う安全策を工夫し、校内外の安全確保の取組を行っているという回答が80%以上である。 (保護者、教職員)	教職員: 93.3% 保護者: 94.5%	A	・保護者や学校支援ボランティアと協力しながら、大勢の目で児童を見守る体制を作る。 ・PTA地区役員や学校支援ボランティアと積極的に情報交換を行い、危険箇所や登下校の様子を把握して指導にいかす。 ・新校舎での安全通し方について、ルールに従って生活できるように繰り返し指導する。	教職員: 97.6% 保護者: 95.4%	A	・学校支援ボランティア(たすきボランティア)と協力して登下校の安全の確保に努め、工事による通学路の変更にも対応できた。 ・ボランティアや地域の方からの情報提供を受け、速やかな児童の指導や対応に努めた。 ・児童は新校舎での生活に慣れすぎて、ルールも理解できてきた。ルールを守って気持ちよく生活できるように引き続き指導する。	・自己評価は適切である。 ・学校支援ボランティア(たすきボランティア)と協力した見守り体制ができており、今後も継続してほしい。 ・子ども110番の家、学校支援ボランティア、学習支援ボランティア等は、登録数と稼働数が一致していない。そのため、組織としてどういった体制で働いているのか、現在も「子ども110番の家」として利用できる家だこなのか、実態が分かるように、開かれた学校づくりを進め、児童の安全を守るためにも実態把握に努めてほしい。	